

第20回清水町みらい会議要旨

○開催日 令和6年12月5日（木）

○会場 清水町役場第1会議室

○出席者（委員）

- ・岩崎 清悟 座長（静岡ガス株式会社 元取締役会長）
- ・植田 勝智 委員（ファルマバレーセンター センター長）
- ・川村 結里子 委員（株式会社結屋 代表取締役）
- ・長倉 一正 委員（有限会社長倉書店 代表取締役）
- ・矢嶋 敏朗 委員（日本大学国際関係学部国際総合政策学科 准教授）

議題：「未来をともにつくるまち」に向けて（協働・協創のまちづくりのための方策）
町民に地域活動への参加を促す方策について
関係人口を拡大する取組について

1 交通体系について（第19回みらい会議に関連して）

- ・ ふれあいアンケートの詳細を見ると、交通体系に関する要望や現状の不満が強く出ていることが印象的だ。まちづくりにおいて、交通体系は真剣に考えなければならない。駅から遠いこと、特に新幹線が停車する三島駅から遠いことが将来的に致命傷になると考えている。宇都宮市は、駅を核として、どのような交通体系をつくるかを徹底的に考えたことで成功した事例である。清水町に新しく駅をつくるのは難しいので、三島駅との関連をどのようにつくるかが重要だ。そして、バスの交通体系やタクシーの活用も視野に入れるべきでないか。長泉町では、タクシーを上手に活用している。
- ・ 交通戦略において軸になるのは交通手段である。全国的に駅とまちづくりを一体化して、そこから放射状に交通網をつくるのが主流になっている。宇都宮市ではまず、約20年間の交通戦略をつくった。拡散している地域を救う手段としてバスを10倍近く増便し、さらに基幹鉄道で宇都宮ライトライン（LRT）を設置して全体をつなげる戦略がとられている。

- ・ バスが駅とつながると利便性が良くなり、くらしやすいまちとしてレベルアップする。路線バスとコミュニティバスの組み合わせをどうつくるかが非常に重要である。結節点が3つあると良い。
- ・ 宇都宮市は、郊外から市街地へ自家用車でやってきて駅の近くに駐車するパークアンドライドを取り入れており、事例として参考になるのではないかと。休耕地を借り上げて駐車場にしたり、路線バスのバス停付近に駐車場をつくったりして、車の台数を50～100台でも減らせれば、交通渋滞の解消につながるのではないかと。
- ・ 三島一沼津をつなぐバス路線は主要路線だが、便数はどんどん減っている。
- ・ 現在の公共交通会議は、行政関係者や交通事業者で構成されている。地域公共交通計画の策定に当たり、同会議を法定協議会とするので、有識者として大学教授に参加していただく予定である。
- ・ コミュニティバスのルートは、地域の方々から様々な意見がこれまで蓄積されている状態にある。それらの意見を反映できるような手法を議論したい。
- ・ バスは、サントムーン柿田川までが基本的な収益路線となる。ここを何回か往復することでバス路線の収益性は上がる。それ以外の場所をコミュニティバスで賄えば、共存が可能ではないかと。
- ・ 東海バスも、沼津駅、清水町を通過して三島駅まで行くが、赤字路線なので町が補助金を支出している。今は使う人が少なく、バス会社単独であれば撤退していた。

2 「未来をともにつくるまち」に向けて（協働・協創のまちづくりのための方策）

(1) 町民に地域活動への参加を促す方策について

- ・ 沼津商業高校の生徒を巻き込み、地域のことを学んで清水町を好きになってもらうことはできる。高校生に町を歩いてもらい、何か提案してもらおうといった活動によって、町に愛着や活気が生まれる。次のステップは中学生や小学校になるが、指導する教員の育成といったソフト面で課題がある。
- ・ 小中学校でも探求活動に取り組んでくれており、中学生は役場の関係課を訪ねて調べ学習をし、まちづくりの提案を行っている。清水小学校の6年生も発表を行い、町三役も発表会に招待している。こうした活動を通じて、子どもたちから清水町を好きになってもらいたい。

- ・ 子どもを対象に、学校のグラウンド等を使ってサバイバル生活を体験するイベントを地域で開催してはどうか。災害に備えた体験をすることができるし、地域の大人とのふれあいも生まれる。地域への愛着を育むためには、継続してできる事業、特に体験型が重要ではないか。
- ・ そもそも、どのような地域活動があり、どうしたら参加できるのかがわからない町民が多いのではないか。例えば、結婚を機に町外から転入してきた母親は、どこかで人とつながりたい、子育てサークルに参加したいと思ってもわからないなど、潜在的に困っている人がいるのではないか。町民生活に光を当てて、丁寧な情報提供を行ってほしい。町民同士でつながりが持てるアプリなどの取組もよいのではないか。
- ・ 町のくらしやすさに関する全てのスコアを上げるのは限界がある。上げるべきスコアを明確にしたほうが良い。

(2) 関係人口を拡大する取組について

- ・ 地域の愛着と関係人口に対して、どれだけ地域に対して活動してくれる人を増やしていくかが必要である。アニメの巡礼に来た人は、アニメのためだけに来ており、そこからさらに町を観光する人はわずか数パーセントである。コンテンツで観光客誘致を行うのは単発で発展性がない。そのため、豊かな自然環境と地域の活力、誇りが高まる方向に本気で関わりたい外部の人材と紐づけるような施策が必要である。
- ・ 継続性が重要である。単発でイベントを実施すると、たまたまその情報を得た人が来るだけで、その後が継続しない。職員がネットワークを作り、継続的に関わってもらうような施策があるとよい。さらに、情報発信の面で広報も大切であり、継続的に関わられる状況を作ることが必要である。
- ・ 自然の豊かさを一つの目玉にする考え方もある。県東部のある地域では、ひまわりが植えられていて、テレビのローカルニュースで取り上げられたことで周辺から人が集まった。親子連れを対象に、花を植えるところから摘み取って肥料にするところまで体験する住民参加型のイベントができる。来年の春になれば芽が出るので「今年も行こう」となる。地域の人たちに喜んでもらえれば、観光に結び付く可能性もある。

- 清水町にも観光資源は十分ある。インバウンドなど関東圏から伊豆半島へ多くの人を訪れている。日本人にとって何でもない風景が、外国人にとって感動する景色になる。地方のショッピングモールではインバウンドに対応できてないことが多いが、外国人に人気のある店舗が入っているだけで多くのインバウンドを呼び込めることもある。観光も捨てずに頑張してほしい。
- 町が何を目指すのか、どのようなことをやろうとしているかというビジョンが大切である。町が掲げる「笑街健幸都市」をもっと生かしてほしい。様々なところで「健幸」を柱にして、町の売りにしていけるとよい。清水町は土地が平らで、歩くのに適している。現在の交通体系は自家用車の体系で、人の体系ではない。歩いて楽しめるまちづくりを考えてはどうか。
- 今もなお残るあぜ道を徹底して歩く道にして、丸池や柿田川、富士山など見どころを掲げたウォーキングコースを作ったらよい。人がたくさん歩くようになると、土地の所有者も草を刈ったり花を植えたりする。それが本来のまちづくりではないか。小さい町でも町の特性を最大限生かしたまちづくりを進めていければ協働・連携も生まれてくるし、町の姿も変わってくる。
- 「コト」はいくらでも生み出せるので、そこに力点を置く。「コト」に町外の人も参加してもらえると、関係人口も生まれてくる。町民が参加し、町民自身で発信できる環境を作してほしい。
- 柿田川公園のある場所は樹木に覆われているので、国道1号を自動車で走ったとき、道路から見て何があるかわからないという意見がある。そこで、国道1号から公園全体が見えるようにと、国と一緒に動き始めるようになった。国道沿いに公園が見えれば、行ってみようと思う人が出てくる。